

# 教育相談的方法を生かした社会科教育の実践

一高校「倫理・社会」「政治・経済」を中心として一

新潟県立新潟中央高等学校教諭 安 沢 順一郎

## I はじめに（主題設定の理由）

＜教壇から生徒へ＞という一方通行，講義中心の無味乾燥・知識偏重の授業ではなく，むしろ対象である生徒の心にくいり，生徒をして自らの人生観・世界観を探究していく主体への自覚を期待しうる方向をめざして，ここにカウンセリングの方法から示唆をうけつつ＜生き生きとした社会科教育＞を切りひらくべき模索の第一歩をふみだしたい。

## II 研究の目的・構想

ひとりひとりの生徒が，自らの手で自らの人生を模索し，自らの足で自らの人生を歩いていく，といった主体的な人間の生き方を教育が生徒に期待する上で，とくに心したいことは教師が生徒とともに自己の人生に真剣にとりくむ，といった＜生のコミュニケーション＞を共有しながら，教師と生徒とのコミュニケーションのルートを確保することであろう。そのために，次の3点に配慮することがたいせつとなる。

(1) 生徒が自己の問題関心を自由に教室で話しあえるふん囲気をつくりだす，とともに「ひとりの悲しみがクラス全体の悲しみになり，ひとりの喜びがクラス全体の喜び」——となるような，学級集団の連帯性の中で，ともに鍛えあい，支えある人間関係を築いていくこと。

(2) 授業を中心として，社会科教育の目標を照合しながら社会科の内容，教材を現代に生きる生徒の問題関心とかかわりあう接点の探究。

(3) この社会のなかで呼吸している“生”の生徒の問題関心の所在を認識し，あるいは，眠っている自己の問題関心に気づかせる。

## III 研究の方法

### 1 研究の対象

2・3年の女子高校生。「授業における現代との接点」の分析や「3分間スピーチ」などは，2年生300名，3年生150名。アンケートは，2年・3年生ともに各200名で合計400名を研究対象とした。

## 2 調査の種類

「授業における現代との接点」をはじめとする授業分析のために『倫社（政経）学習のあゆみ』を各HRごとに記録するとともに、講義にはいる前に実施する『3分間スピーチ』『写真で綴る私のこの1年の人生記録』『私の人生の青写真』というレポートを中心にしたい。

## 3 実施の時期

1969年4月～1970年10月。なお、アンケートの調査期日は1970年10月12・13日である。

# Ⅳ 結果とその考察

## 1 『3分間スピーチ』を中心として

（1970年6月5日第6時限，2年進学クラスから『3分間スピーチ』を紙上録音）

司会を担当するHR委員が，スピーカーのとりあげたテーマと氏名を紹介したのち，教壇の上でスピーチが始まる。

漠然とした，しかも私的なことで恐縮ですが，今の私には社会に目を向けることができない——そのような心のゆとりはないのです。まさに，心の中で強まった欲求を充足させる見とおしがさしあたっての未来にはたえない，つまり欲求不満の緊張状態におちいっているわけです。

私の欲求——それはこの冷たい学校生活から逃げ出して夢の世界に入りたい，ということ。しかし，それはどう考えたって実現不可能ですから，現実的なことだけとりあげてみます。

① 好きな勉強を好きなだけやりたい／② 嫌いな勉強は絶対にやりたくない／③ 歴史書・文学書・哲学書・宗教書・まんがなど，あらゆる本を読みたい／④ 美しい風景，個性的な顔などをデッサン，あるいは油絵で自由に描きたい。

ごく平凡なこれらの現実的欲求が，現実と激しく戦っているのです。あれこれ考えているうちに結局，何もできない。現実には負けてしまうからでしょうか。私がいくら自分に忠実な強い意志をもって＜単位＞というグロテスクな化け物には勝てないからでしょうか。（倫社）教科書35頁には，「強い意志をもって，情緒的な激動をさけ………」と書いてありますが，これでは一体，何のための人間なのでしょうか。人間として，美しいものを求める心を失ってしまったら何が残るのでしょうか。私は，教科書のあげるような理想の人間になどなりたくありません。パーソナリティにルールなどありません。私から情熱を奪ってしまうような，この憂き世に何の未練がありましょう。朱に交わって赤くなるなんて，やりたいこともできないなんて，何のために生まれてきたのか，何のための人間なのか疑問です。

「盛り場ブルース」という歌を知っていますか？ 私の好きな歌です。しかし、この歌は私の生きる力を奪っていくのです。

咲いて流れて散っていく／今じゃ私も涙の花よ／どこにこぼしたまことの涙／さがしたいのよ  
銀座、赤坂、六本木

当然のことです。夢も希望もない人生の裏通りの歌なのですから……。そうです。私は灰です。それも自分で自分を灰にしているのかもしれませんが。でも、私は思いっきり燃えてみたいんです。たとえ、燃え尽きて灰になっても、燃えずして灰になっているよりどんなにすばらしいでしょう。誰のための勉強でしょうか。もちろん自分のためです。自分のためのものですから、自分に役立たねばなりません。

私に、ほんとうに役立つのは、美しい大自然とウォルト＝ディズニーの美しい絵なのです。夢を追求め、美しいものに感動する豊かな心をもつことが、一番たいせつなことだと思います。こんな私も、しゅせんうたかたのモガキなのかもしれません。

スピーカーへの質問をかねての討論から

Q<sub>1</sub> 自分の欲求を満たすためには、すすんで条件を変更する（社会を変革する）必要があるのではないか。

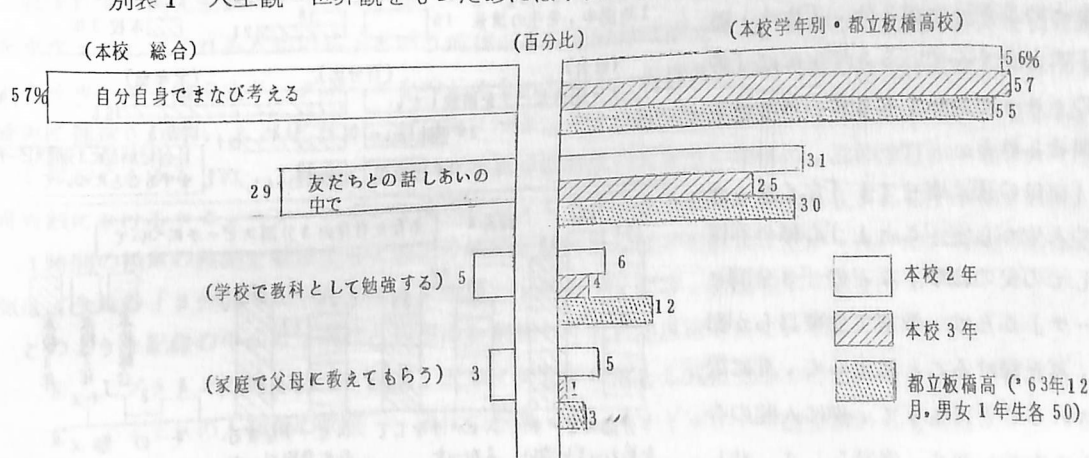
Q<sub>2</sub> 青春期にあるからこそ、このように悩んでいるが、それは人生の一時期の＜戯れ＞ではないのか。

Q<sub>3</sub> 近道反応の危険は犯したくない。社会へ眼を閉じての私生活への逃避は、ファッショムへの途を開きかねない。

Q<sub>4</sub> スピーチは、けっして＜青春時代の戯れ＞ではないのだ。灰になる、というコトバは私の脳に突きささる。目先きにしばられての勉強、たとしたら浮かばれない——高校生活のあり方を変更するなどして、社会にたいする個人の合理性を生みだしたいと思う。

〔スピーカー〕 Q<sub>4</sub> のように考えてくれたのが、何よりも嬉しい。きめつけてほしくなかったしもっと多くの人の意見を聞きたかった。いろんなパーソナリティがあるものですね。毎日、やるべきこと、勉強をしないのは、やっぱり悪いことかもしれません。

別表1 人生観・世界観をもつためには、次のどの方法がよいと思いますか。



でも、疑問に感じるのです。

〔本日の記録生徒の感想〕

みんな、それぞれ真剣に考えていたようでした。私もそうですが、みんながあのよう考え、悩みをもっているせいではないでしょうか。ほんとうに、もし自分が死に直面した場合、自分の送ってきた人生をふり返って、はたしてどれだけの人が満足できているでしょうか——疑問です。ほんとうに、自分の心のよりどころとなる＜何か＞が、必要なのです。私には、今のところ見あたりません。それを求める限り、人間は迷い、苦しむのでしょうか。私も＜何か＞をみつけない。（わかりにくかった点は……前の授業に欠席したので「欲求不満と悩み」という今日のスピーチのもととなることがよくわからず、残念でした。）

学習者の全人格による学習、すなわち知能はもちろん感情も含めた自発的な学習が、最も深く浸透し、また長つづきのするものである。われわれはこのことをサイコセラピーの中に見いだすことができる。その中には自分自身による最も効果的な、すべてを傾注した自己に対する学習がある。これは“首から上の学習”ではない。もっと深い部分にいきわたる内臓レベルの学習といえる。

— ロージャズから学ぶこと

多くの調査でも知られるように、生徒は自分の人生観・世界観をもちたい、と思っている（本校調査では、2，3年で95％）。しかも、人生観・世界観をもつ方法として、別表1が示すように、「自分自身でまなび考え」（57％）たり「友だちとの話しあいの中で」（29％）という項目が高い比率を占めている。生涯にかかわりが深い人生観・世界観であるだけに、独断論は避け、民主主義社会が多元論をとっている点から、学校集団の中で、相互に鍛え、支えあうことを志向して「3分間スピーチ」をとりあげたわけである。「倫理・社会」を学んでいる2年生は「私の人生に思うこと」というテーマで3分、「政治・経済」にとりくんでいる3年生には「最近のニュースから」で3分、スピーチが課せられる。

「祖母の死に寄せて」「亡くなった父の人生から学ぶこと」「心臓外科医としての父の仕事」などの「3分間スピーチ」からは、教室で生徒自らが語り、耳を傾けることによって、死に限定されることによって、逆に人間の今の生き方のし烈さ、素晴らしさ、悲し

別表2 「倫社」や「政経」などの社会科の  
授業のあり方について



別表3  
社会科の時間に3分間スピーチ  
をすることについて



さが胸をうち、とかく断片化され見失われがちな自己の人生が、≪これでよいのか≫と鞭うたれる。また、テレビ「七人の刑事」にふれて、ある女生徒は、「人間などという動物はにわとりのようなものだ」という画面に登場する学生のコトバから、現代社会ですすんで檻の中にはいり、いっしょうけんめいに努力している人間の姿を対象化し、自己の現実存在に分析を加えつつ、現代人の実存について問題を提起する。

日本やアジア、世界の中で人生をとらえるという志向は、3年生「政治・経済」のスピーチで、「敬老の日に寄せて — 日本の家族制度と憲法第25条」「あなたのしあわせを分けてあげてください — 精神薄弱児の施設を」「女子の30才定年制は無効」の判決に思う」というふうに、力点の置き方が変わってくる。長崎での「イタクナイイタクナイ病」というテーマの紹介に疑問を感じていると、実はイタイタイ病のこと、地域や企業の圧力で調査に赴いた専門家に事実をかくさざるをえない日本の現実の断面が、浮かび上がってくる。

別表3が示すように、68%の生徒が「3分間スピーチ」の継続を希望し、とくに2年生の支持率は79%ときわめて高い、ともいえよう。「倫社」や「政経」などの社会科の授業のあり方についても「3分間スピーチのあと先生の講義」の62%と「生徒のグループ発表」の20%を含めると、これまで生徒参加の授業形態に、かなりの賛成、要望があることが知られる（別表2）。もちろん、2年生と対比しつつ3年生をみると、そこに問題がないわけではない。「1時間中、先生の講義」「3分間スピーチ」を廃止したい（各21%、27%）という原因に、スピーチのマナーリズムや知識一辺倒の受験体制へのやむをえない傾斜などを挙げなければなるまい。別表4の「スピーチが負担だった」とするアンケート結果からは、なおよく分析を加えなければならないが、発表のための資料の収集（新聞のスクラップや日誌などの利用）を通じての問題意識の醸成、国語科やHRとの関連で表現力や対話の技術、カウンセリング的方法の導入 — などが、推し進められる必要がある。

## 2 『倫社（政経）学習のあゆみ』を中心として

戦後日本の民主主義は、キャッチボールから始まった。つまり、自分にとって、自己の投げるボールをキャッチしてくれる人がある、という前提があって野球は成立する。教師は、生徒に直球を投げたりときにカーブ、魔の大リーグボールを投げよう。しかし、教育実践の場で教師の投げたボールが生徒に確実に捕球されているかどうか。ディス・コミュニケーションを問題にせざるをえないのである。

『学習のあゆみ』は、1時間ごとにワラ半紙半裁程度の大きさの用紙に、次の項目が用意されて、教育実践におけるコミュニケーションを確実にし、より実りある授業を志向しようとして用意された。

1時間の授業の展開を整理する／面白く興味をひいたのは／わかりにくかったのは／授業中のふん囲気は／今日の「3分間スピーチ」（スピーカー、テーマ、要旨、討論のポイント）

このような記録の中から、現代との接点を重視した教材が用意されていく。

E<sub>X1</sub> プラトンの理想国 — 諸君、デモクラシーの落とし穴に気がつけて

E<sub>X2</sub> イエスの人類愛の宗教 — 現代の聖者・シュヴァイッアーの底を流れるものは

E<sub>X3</sub> カルヴァンの職業召命観 — 生きがいをどこに求めるか

E<sub>X4</sub> 社会契約説 — アメリカ兵の亡命問題をどう考えるか



E<sub>x5</sub> J・J・ルソーの「自然にかえれ」― 公害の問題, など

### 3 『写真で綴る私のこの1年の人生記録』『私の人生の青写真』を中心として

自己の人生をしっかりとみつめ、一日一日を記録していけるように＜生きがい＞のある生涯を送ってほしい。いわば、自己の人生の歴史を創っていく精神の原点をこそ、青春時代に確保していきたい、との願いから、この課題を用意した。とくに、＜映像の世代＞といわれている現在の高校生に、写真を用いての人生記録にとりくんでもらった。

胎内川へ遠足して友情を確かめ、「友情」という武者小路実篤の詩に自己の心境を託す女子高校生／8月、家族で登った弥彦／修学旅行で竜安寺と西芳寺の共通点を“心”という字にみだし、この“心”という字をいつも隙なく描きたい、とこの一年間の自己の人生の足跡をしるす。あるいは、タイガース来新のときのステージ写真にそえて「脳がマヒしたみたい」と綴る乙女。一方、「2,000年、48才― 私はどうなっているか」という生徒は、1971年以降の自己の人生の青写真を描きだす。デザイナーを志す彼女は、1983年には、遅ればせながら実力を認められ、六本木に「KUMIKO ORIGINAL 開店」とある。

過去と未来をともにはらむ現在にあって、生徒はひとりひとりが過去動力因と未来目的因につき動かされざるをえない。課題を生徒の自己展開学習とただけに好評で、多くの生徒は、これからも毎年試み、中には結婚して子どもができたなら、その前史をふくめて育児の記録を綴り、その子の嫁ぐときにもたせたい、と語る生徒もいる。生徒が所属している各HR主任が、これら生徒の作品に興味をもったことから、社会科と他教科、HRとの関連を考察しつつ、学校教育、社会教育、家庭という照明をクロスさせて、生徒を一個の人間主体として＜焦点＞をあてて理解していきたい。

### 4 『学習発達の記録』の考察

対象生徒を＜成績＞からではなく＜人間＞から理解したい、との願いから、現住所／家族との同居・別居／学んだ小・中学校（心に残る先生）／高校社会科担当の先生・興味をもったテーマ／クラブ／家族構成／相談相手／「3分間スピーチ」や各種課題の記録などの生徒1人1枚の個票（写真付）を作製、理解を深めたいとの試みをはじめている。

## おわりに

これからの課題として、次のものがなお追求されなければならない。

- 1 教科内容を現在以上に、生徒が自己展開学習として主体的に学んでいく方法
- 2 教科の評価方法の根本的検討をすすめること

とくに、1については『ロージャズ全集』第5巻所収の論文、とくに67, 73, 92, 127, 155, 197, 216-217の各頁、2についても同書111, 185各頁の指摘は、今後の導きの糸になるものと思われる。